



# 冬の旅

1985年/フランス映画  
配給：ザジフィルムズ/105分

2022 (令和4) 年 12 月 10 日 鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督・脚本・共同編集：アニエス・ヴァルダ  
出演：サンドリーヌ・ボネール/マーシャ・メリル/ステファン・フレイス/ヨランダ・モロー/パトリック・レブシンスキ/ジョエル・フオッス

## 👁️👁️ みどころ

1985年と言えば、日本はバブル真っ盛りの時代だが、フランスではこんな女性監督が「漂流する女性映画の金字塔的作品」を！

私は、『WANDA ワンダ』（70年）を観てはじめてバーバラ・ローデン監督を知ったが、本作を観て、はじめてアニエス・ヴァルダ監督を知ること！

シューベルトの歌曲『冬の旅』はもともと暗いが、同じタイトルの本作には、暗さは全くない。むしろ、「冬の旅は人がいないので、私は大好き」と語るヒロインの自由を愛する強い気持ちが伝わってくる。しかし、そんな「冬の旅」の終わりは・・・？

『ノマドランド』（20年）に続いて漂流する女性映画の傑作を本作で！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆私は全く知らなかったが、本作は「漂流する女性」映画の金字塔的作品らしい。私は、バーバラ・ローデンの『WANDA ワンダ』（70年）（『シネマ51』261頁）を観て、はじめて女性監督バーバラ・ローデンの名前を知ったが、本作を観てはじめて女性監督アニエス・ヴァルダの名前を知ること。

いわゆるロードムービーの名作は多いが、直近の「漂流する女性映画」の傑作は、クロエ・ジャオ監督の『ノマドランド』（20年）（『シネマ48』24頁）。ドキュメンタリー映画のような同作では、監督自身が率いる撮影隊が5か月間7つの州を旅しながら、ノマドのコミュニティと共に暮らしたそうだが、さて本作は？

◆『冬の旅』と聞くと、私はシューベルトの歌曲『冬の旅』を思い出す。本作の邦題は同じ『冬の旅』だが、原題は『Sans toit ni loi 屋根も法もなく』。つまり、屋根も法律も拒否して彷徨う若い女性のホームレスの物語だ。

ドイツの詩人ウィルヘルム・ミュラーの詩集を2部に分けて、24の歌曲で構成したシューベルトの『冬の旅』は、“社会からの疎外”という近代的テーマを背景とし、死を求め

ながら旅を続ける若者の姿を描いたものだから、基本的に暗い。しかし、同じ『冬の旅』と題された本作は、最初に18歳の女性モナ（サンドリーヌ・ボネール）の死が示されるものの、そこから遡って始まるモナの「冬の旅」は、決して暗いものではない。むしろ、逆にモナには死など全く無縁で、自由を求めるため、孤独を恐れない彼女の姿はなんと頼もしい。「冬の旅は、人がいないから私は大好き」と、モナは語っていたが・・・。

◆本作と同じ日に観た『あのこと』（21年）は、2021年の第78回ヴェネチア国際映画祭の金獅子賞を受賞した作品で、原作になったのは、2022年にノーベル文学賞を受賞したフランスの女流作家アニー・エルノーの自叙伝的作品。

それに対して、本作は1985年の第42回ベネチア国際映画祭で金獅子賞を受賞した作品で、アニエス・ヴァルダ監督自身が脚本を書いたものだが、1985年当時、既にフランスには、アニエス・ヴァルダのようなすごい女性監督がいたことにビックリ！

◆本作は、冒頭、畑の側溝で死亡しているモナの死体が発見されることから始まる。実況見分の結果、事件性はなく、凍死と判断されたが、18歳の女の子がなぜこんな状態で行き倒れに・・・？

モナは服は汚いうえ、観客にはわからないものの、悪臭もブンブン臭うらしい。アニエス・ヴァルダ監督は、そこから時間軸を戻し、一人で南フランスの各地を転々と移動していくモナの行動を、生前のモナと関りを持った人物たちの18の“証言”で構成していく。女の一人旅でのヒッチハイクには危険が伴うが、モナが欲するのは何よりも自由。そのためなら、飢えも迫害も仕方ないと彼女は割り切っているらしい。したがって、勤勉に働くことを当然の価値観としている人間には、モナのような女性が受け入れられるはずがない。その結果、あちこちで各種の衝突も・・・。

モナは、基本的には寝袋や自前のテントで寝泊まりしていたが、例外的に長期滞在したのは、①羊飼いの夫婦の家、②教授の家、そして、③主を失った巨大な洋館の中。したがって、本作ではそこでのモナの生活ぶりが詳しく描かれるので、それに注目！

◆アニエス・ヴァルダ監督の作品は、フィクションの中にドキュメンタリーの真実を、ドキュメンタリーの中にフィクションの虚構を巧みに取り入れ、自在に行き来しているようだ。そしてまた、それを端的に示したのが、「ドキュメンタリー (Documentaire)」と「偽物 (menteur)」という言葉の掛け合わせた造語を作品タイトルにした『ドキュメントゥール』（81年）だそうだが、さて本作は？

アニエス・ヴァルダ監督最高の傑作と言われながら、その難解さのため、あまり陽の目を見なかった本作の価値を、今こそしっかり確認したい。

2022（令和4）年12月13日記